

DANKAI 日本橋アカデミー 卒業フォーラム基調講演
「本格化する高齢社会 世界の中の日本と団塊世代への期待」

村田裕之

2007年3月12日
マンダリンオリエンタル東京

団塊世代の活躍する分野は広い
世界が注目する日本の取り組み

人生の後半生のライフスタイルをどういうものにするかが、団塊世代が最も関心のあるテーマだ。そのモデルとして、一つは自分の好きなことをして自分が楽しむ、もう一つは次の世代のためになることをして自分も楽しむ。この二つが考えられるが、今回は後者を中心に話を進めたい。

米ジョージ・ワシントン大学のジーン・コーエン教授が「いくつになっても脳は若返る」という著書の中で、年齢と脳の間接関係を四つの段階に分けて論じている。それによると、五十代後半から七十代前半は組織や家族などから解放される世代で、「解放段階」と名付けている。団塊世代の多くはまさにこの段階に達している。

最近の研究で脳は五十歳を過ぎても成長を続けることが分かっている。記憶をつかさどる海馬にある「樹状突起」の密度が最高状態になるのが五十代から七十代前半、つまりこの世代である。海馬の機能は、情報を記憶することではなく、その情報が必要か不要か判断すること。年配者の直感力や洞察力が優れているのは海馬の発達と関係がある。ぜひ、ご自分の潜在能力に自信を持っていただきたい。

さて日本の高齢化のスピードは世界で最も速く、高齢化率(全人口に占める六十五歳以上の割合)は二〇〇五年ですですに二一%に達し、世界一だ。一四%を超えると高齢社会だから、日本は超高齢社会と言ってよい。

そんな中、米国の「AARP」という五〇歳以上の人が約三千七百万人加入する非営利組織(NPO)がある。この団体が今日本に熱い視線を送っている。それは日本の高齢社会対策や団塊世代の活躍などが、世界のモデルケースになると見ているからだ。

注目している点の第一は年金制度改革を含む社会制度の変化。高年齢者雇用安定法の改正や介護保険制度も注目されている。日本国内ではさまざま問題点が指摘されているが、ここまで整備されているのは日本だけで、これから高齢社会を迎える多くの国が注目するのは当然のことだ。

第二に商品・サービス。これも世界中が関心を示している。脳を鍛えるゲームソフトをはじめ、高齢者向けの携帯電話、直販の生活応援雑誌、中高年会員を対象にした旅行企画、介護ロボット、自動排せつ処理機能が付いた介護用トイレなどが一例だ。

さらに高齢者が参加することで事業を拡大しているニュービジネスも多い。例えば裏山の柿の葉っぱなどを加工して商品にするビジネス。ここでは八十代の高齢者が自らパソコンを使って生産や売り上げの管理をしている。ほかにシルバー人材センターや高齢者向けの食品会社など多彩な業種で展開されている。こうした取り組みが多く、国々から高齢社会のモデルづくりの参考例として一目置かれ、新たな国際貢献になる。

ここで団塊世代の皆さんに提案したい。それは高齢社会に対応した新商品・サービスづくりに参加することだ。お勧めしたいのは大学の産学連携活動に協力する形での参加だ。

現在、大学は少子化で競争が激化しており、研究成果をいち早く事業化し、世に出すことで差別化を図り、大学の経営力を高めようとしている。ところが、大学発のベンチャー企業も三百六十二社中、半数以上が赤字経営(二〇〇四年三月現在)となっているように、大学には事業化の専門家が少ない。

そこで百戦錬磨の団塊世代OBが大学にスタッフとして参加し、商品企画や営業、後輩の育成などに当たる。大学にとってだけでなく、団塊世代自身にとっても若いメンバーと一緒に仕事ができるなどメリットも多いはずだ。

こうした産学連携の参考となるのが「カレッジリンク型シニア住宅」だ。これは大学の近くに民間企業が高齢者住宅をつくり、連携して運営するもの。米国では、入居者が年間四百五十時間以上、大学で授業を受けられる例もある。また大学の施設を自由に使え、いろいろな活動も学生と一緒にできるなど、多くのメリットがあり注目を集めている。

日本国内でも私自身が関与して、関西大学と一緒に神戸市で「アンクラージュ御影」という日本初のプロジェクトを進めている。

団塊世代の後姿を次の世代は眺めている。次の世代に役立つ、何か自分ができることを見つけてチャレンジしていただきたい。